

後宮の調達人
～ほおずき鬼灯の章～

弥生 Yayoi



アルファボリス文庫

目次

プロローグ

5

第一章 調達人、星読みの女官の依頼で満天の星を灯らせる

7

第二章 調達人、朱妃の依頼によって赤子に祝福を授ける

96

第三章 調達人、老婆の依頼で宮廷の花壇を清掃する

153

第四章 調達人、桃妃の依頼を受けて後宮を駆ける

194

第五章 調達人、管理者の依頼で人が消える事件を解決する

270

プロローグ

宮殿の奥、皇帝にしか入ることを許されていない場所があった。

皇帝の妃たちが住まう美しい花園、後宮。

そしてそこには、妃のために集められた者たちもいる。

皇帝のために咲き誇る美しい妃を支えるため、その者たちは自身の役目を果たす。

妃に仕える女官、宮を整える女官見習い、後宮を維持する宦官。

美しい衣装で主を着飾り、主が住まう場を整え、湯水のように消えていく財を管理する。

ただ、ひとつだけ、その者たちに課せられた使命があるとするならば。

——皇帝の寵愛を主に向けさせること。

美しい鳥籠のような終の棲み家^{ついで}で、ただ一人皇帝の寵愛を切望する妃たちを咲き誇らせる。

彼らは外に出ることが叶わない妃たちのために希^{こいねが}う。

戻れない故郷の想い出を。入手困難な逸品を。あるいは他の妃より優位に立つための道具を。

愛憎渦巻く後宮で、望む品を届ける『調達人』と呼ばれる者がいた。

ときに人の望みを叶え、ときに人の闇に触れ。

善^よき調達人とは、善く聴く耳を持ち、善く観る目を持ち、善く沈黙する口を持つ。

後宮に住まう者たちが望むのなら、どんなものであっても、必ず調達人は送り届ける。その先になにが待ち構えていたとしても。

第一章 調達人、星読みの女官の依頼で満天の星を灯らせる

皇帝が住む広い宮廷の奥深く、高い堀で囲われた場所に後宮は存在していた。

後宮は、皇帝ただ一人のために集められた妃たちが住まう場所だ。すべてが揃い、様々な望みが叶えられるが、一度入れば決して外に出ることは叶わない。

大きな正門と裏手に小さな門が存在しているが、どちらも限られたときにしか開かれることはない。

宮廷と後宮を繋ぐのは、見張りによって昼夜を問わず監視される建物ただひとつ。

そこには後宮の管理者がおり、その者の指示によって宦官が後宮を維持していた。

建物内部は宮廷と後宮の境目のところで床材が変わっており、後宮部分に男性は入ることができない。

そんな境に近い宮廷側の一室に、管理者はいた。

「仕事だ」

こちらを見もしないで、鋭い美貌の管理者は言い放つ。

調達人である私——紅姑娘は内心で、はーっと息を吐く。

せめて誰からの仕事だとか、どんな内容かとか言ってくれないかしらね。他の人はあなたほど聡くはないから少しでも情報を与えられないと、推測すらできないというのに。「どなたが、なにをこそ望でしょうか」

ちらつとこちらを見て、鼻で笑われる。こんなことも推測できないのか？　みたいな顔で。

ぐざぎ、むかつく……！

「人間は言葉によって情報のやり取りをする習性があるのですが……管理者におかれましては、明晰なる頭脳をお持ちのため会話も必要なく、そのような常識をお忘れになつてしまったようですね」

人間には口があるんだからちゃんと会話しろ、である。

一方、管理者はこんなことも口にしないと伝わらないのか、といった表情である。腹が立つ。

「次の月、大掛かりな星見の宴がおこなわれる。となれば、依頼は星見の宴に関連し、依頼者も宴を主催する藍妃宮の者だとわかるだろう」

いや、わかるか！　他にも仕事はたくさんあるんだから依頼の特定なんてできるはず

もない。

「では藍妃様に御用をお尋ねすればよろしいのですかね？」

「いや、依頼者は藍妃に仕える女官だ。此度の宴の開催について占った星読みの一族の娘だという。詳しくは藍妃に尋ねろ」

星見の宴は、雨が多い時期を終え、草木が生い茂る夏の訪れを寿ぐ宴だ。満天の星が輝く新月の夜に、明かりを消して星を鑑賞する。

その開催の日を決めるのは、通例だと宮廷の神官や呪術師、占術の手ほどきを受けた姫君だが、今回の星見の宴では、神官を多く輩出している星読みの一族の娘に占わせたようだ。

まあ呪術といっても、実際には吉日を占ったり、悪い方角を避けたりと民間信仰に近いものだけだ。今回の星見の宴の開催についても、星の巡りと過去の天候の記録から、雨が降る確率が低い日を選ぶだけのようなものだし。

「かしこまりました。それでは一度藍妃様を訪ねてから、星読みの一族の女官にご依頼内容を聞いて参ります」

「ああ、報酬はいつもの通りに」

「はい。依頼人がご希望の品を、調達人としてしっかりとご用意してみせます」

管理者に拝礼をする。

私は後宮の調達人。管理者に命じられ、後宮に住まう妃や女官たちが望むものを調達するのが生業だ。

贅を凝らした食事や珍しい宝玉。他の妃を出し抜く知識の書に、皇帝を魅了する美しい衣装。今は失われてしまった秘宝や、記憶の中にある懐かしい代物だとしても。

調達人はどんなものでも用意する。後宮から出ることができない彼女たちが本当に望むものを。

たとえそれが……彼女たちの隠しておきたい秘密を暴くものだったとしても。



「必ず天候を晴れにする呪具を手に入れてほしいのです。どうしても……宴の日を晴れにする必要があるのです」

「……必ず、晴れに……ですか」

女官の鬼気迫る様子に、私は気圧されてしまう。

年の頃は十八、九ばかりの若い女官だ。切れ長の目で、目尻に朱が入っている。

そして綺麗に磨かれた石を連ねたものを腕輪としてつけていた。

装飾はおとなしいものだが、どちらかといえば儀式などに使われる装いだ。

——後宮では皇帝を楽しませるための祭りを、朱妃や白妃、藍妃や桃妃など、色与えられた妃たちが執りこなう。

一番宴を任されているのは、この後宮の最古参である朱妃。次に多いのは皇帝のお気に入り、の桃妃だ。他は年に一、二度与えられた役割にそって宴を取り仕切る。

もちろん入内してすぐに宴を主催するわけではない。

妃たちは後宮に慣れた頃から小さな宴や茶会などを開催し、問題ないと見なされてから大きな宴を任されるのだ。

目の前の女官が仕えている藍妃は、朱妃に次いで後宮に長くいる妃で、雨乞いや豊穣祈願などの呪術的な意味合いを持つ宴を任されることが多い。

その藍妃からは、国の祭事を司る神官筋の娘を女官として預かったもので、今度の星見の宴に際し、彼女が必要としているものを用意してほしいと頼まれた。

つまり彼女の希望するものを揃えるのが今回の依頼なのだが……

「白星蘭様……ご依頼の品は呪具でございますか」

「ええ、調達人。あなたは幼く見えるけれど、これまで様々なものを用意してきたので

しょう？　そういった呪いの強くかかった品を見たことがないでしょうか」

「確かに、そういった触れ込みのものを取り扱ったことはございますが……」

私を運ぶ籠役の男に与えた鶴ねえの面も、そういう触れ込みがあったものだ。

夜に怪しく鳴くというそれは、東方より伝来した怪物の名だ。

変わった品々を集めるのが趣味という妃に納品する予定だったが、なんだか思ったのと違うし不気味だ、と受け取りを断られ、泣く泣く筆筒なんすの肥やしにしていた。今は籠役が装着したことによって日の目を見ることとなったけれど。

……確かに依頼でそういったわくづきの品を調達することはある。だけど……

「天候を左右する呪具でございますか」

「どうしても、次の宴にはそれがないと困るのです」

これ以上はなにも言えないとばかりにきゅっと口を噤つぐむ。

女官は相当に追い詰められているような表情をしていた。

「白星蘭様ハクセイラン、個人的な発言をお許しただけでしようか」

「構いません」

私は彼女をこれ以上追いつめないように、優しく言葉を続ける。

「占いを当てることは、長く宮廷に仕える呪術師でも容易たやすくないことでございます。絶えず変化し続ける天候を占うならなおのこと。白星蘭様ハクセイランがそのすべての重責を負わなくても……」

今までの星見の宴でも、呪術師の占いが外れて雨が降ることはあった。占いは絶対ではない。そのため、星見の宴には予備日も設けられている。

「……来月おこなわれる星見の宴、後宮での初めてのお役目として、私が暦を占って日取りを決めました。……暦盤で何度も占い……星見の宴に相応ふさわしい、最良の日を選びました」

女官は目を伏せ、きつく片腕を握る。その手は小刻みに震えていた。

「……けれども、私は自分の占いに自信がないのです……藍妃様は、星読みの一族の娘である私に期待して任せてくださったのに……私は、自分を信じきれないのです」

藍妃は、この女官が星読み一族秘蔵の末娘だと言っていた。

女官は今回、宴の日取りを決める大役を任されて、相当緊張しているのだろう。

「私は……もう二度と、失敗は許されないので。どうか、どうか呪具を調達してください」

彼女はなにを恐れているのだろうか。

「……白星蘭様。ご依頼の品は、天候を操る呪具、あるいは晴れをもたらす呪具、でよろしいでしょうか」

私は後宮の調達人だ。どんな依頼の品だつて用意してみせる。……依頼人の望みを叶えるために。

女官が頷く。

「ご依頼承りました。調達人として、白星蘭様のご希望の品をご用意させていただきます」



後宮を辞すと、宮廷の庭で待機していた連れ——籠役の男に抱えられ、宮廷を出た。ちょうど昼を一刻（二時間）ほど越えた時間だったので、休憩を兼ねて町の団子屋に寄る。

馴染みの店主にお茶と団子を頼むと、串に刺さった団子を笑顔で山盛り持ってくる。多すぎないかって一瞬思ったけれど、私の連れは大食漢なのでぺろりと食べきってしまうだろう。

一度引つ込んだ店主が、今度はお茶のお代わりが自由にできるようにと茶器を持ってきた。そのお盆には、頼んだ覚えがない生姜をからりと油で揚げたものも添えられている。

「お嬢ちゃんたちはよく食べに来てくれるからね、おまけだよ」

私は年齢よりも若く見えるらしく、こうしてお菓子や飴をおまけしてもらえることが多い。いや、ニカツと嬉しそうに礼を言う隣の大男の食いつりがたいそうなので店の者に気に入られ、おまけしてもらいことも多いんだけど。

団子の刺さった串を持って、もきゅもきゅと食べる。

疲れた身体に甘味が染み入る。

隣で私の倍以上の速度で団子を頬張っているのは、籠役の月橘だ。

額から頬の部分までを覆う鶴の仮面をつけている大男で、私の籠役、兼護衛、兼見守り役……えーと色々と兼任している。

昔、宮廷からの帰り道に鬼が出るという噂を聞きつけて、解決するために向かった先で出会ったのよね。

ずだ袋を被って毛皮を着た上に、大声を上げながら人を追い回すものだから鬼と間違われていたんだけど……

いや、思い出すだけでも不審人物すぎるなっと思う出で立ちだけど……実際には職探しをしていたのだ。

皇帝直属の禁軍で長年勤めていた軍医……その養い子として禁軍で雑用をこなしていた月は、軍医の爺さんが亡くなってから職にあぶれて再就職先を探していた。

見た目は完全なる不審者だったけれど、この国で推奨される武芸全般——十八般武芸をこなし、家の掃除や護衛だけでなく籠役もできるということで、護衛役兼任としては超お得な一月銀貨五枚で雇ったのだ。

更に古い時代の文字も読めるし、頭も悪くはない。なによりも裏表のない性格なので、捻くれた私が珍しく警戒しない人物となった。

小柄な私は、彼の腕に乗って移動することができる。ちょうど籠に乗って宮廷の中に入ってもよいという許可を得たので、私にとってなくてはならない籠役となった。

ただし、月の素性は現時点でもいまだわかっていない。

ただ一つだけわかっているのは、赤子の頃に捨てられ、禁軍所属の軍医に育てられたことだけ。謎が多すぎて胡散臭さ満載なのだけど、本人が明るいからあまり気にならない。

月は五本目の串をべろりと平らげた。次の一本を団子皿から取った際に、勢いがよす

ぎたのか、団子にかかっていたタレが月の顔に飛ぶ。

「うわ、仮面にかかった」

仮面に手をかけた月に、私のほうが慌てる。

「ちよっと、拭いてあげるから仮面を無闇に外さないの！」

手拭いを取り出し、仮面を外そうとした月を止める。

ぐぬぬ、月の背が高すぎて顔に手が届かない。屈んでもらってやっと鶴の面に飛んだタレを拭き取ることができた。

危ない危ない、素顔を見られたら、大変なことになるところだった。

「取れたか？」

「なんとかね。まだべたついているけど……仮面を洗うなら家でね」

「ああ、わかってる」

月は養い親から、ずっと顔を隠すように言われて育ってきたらしい。

私は月の顔を見ることがあるけれど、確かに隠したほうがいい顔だった。

彼の素顔を表に出せば、下手すれば死人が出る。それを養父である軍医も知っていたのだらう。

「美味しい時間はあつという間だ。団子は、儂い。……あつ、お代わりを頼むが、紅は

何本いる？」

「ちよっと、お代わり頼むこと前提なの？ うぐぐ、半分……いや、一本」

「食べきれなかったら俺が食べてやるからさ。おい」

月はお皿の上に串を綺麗に並べると、店の者を呼んだ。

店の者がやってくると、ん！と彼が指で本数を示す。

店側もよく食べに来る大男の合図を理解しているのか、にこにこ頷き、月の頼んだ本数分のお代わりを持ってきてくれた。

——月は私としか話ができない。

正確に言えば、彼の言葉を聞き取ることができるのが現状、私だけということだけど。彼はおそらく幼子の頃に負った傷が原因で、うまく言葉を発せない。話すとき唸りを上げるような音になってしまう。

私は耳がいたためか、彼の言葉の微妙な違いを聞き取れるので、月の言葉を理解している。

彼の養い親は、彼の話す言葉を他人が理解できなくても困らないように、文字や知識を仕込んでいたのだろう。月の教養は、現役の高官や將軍職の者に匹敵するほど高度な域に達している。

また、私は彼を雇うときに、相手と会話できる方法を教えるという約束をした。言葉が話せなくても、話した言葉を理解されなくても、相手と会話することができ。そのような方法が、この世界には存在しているのだと。おしゃべり好きなのに、亡くなった養い親や耳がいい私としか会話ができないと嘆いていた彼は、とても喜んだ。

その約束どおり、私は暇があるときに、指で会話する方法を月に教えていたが、それをこういふところで役立てているらしい。

私を抱えて移動する姿が板についてきたせいか、市場の店員が彼と挨拶を交わすことも多くなっていた。

見慣れない大男は得体が知れなくて怖い。

けれども見慣れてしまえば、大きな口を開けて美味しそうに飲み食いをする大男は、もう恐怖の対象ではない。

慣れればこの大男は、食いしん坊でなんだか可愛く見えてくるのだ。

「——しかし、天候を晴れにする呪具ねえ」

悩みすぎて言葉に出てしまった。後宮からの移動中、今回の依頼について私から聞いていた月は、意外そうな声を発する。

「へえ、不思議な道具の調達こそ、紅の本領かと思ったんだが。なにを悩むことがある

んだ？」

「私が調達するのは真つ当なものばかりよ？　そもそも呪いとか、信じていないもの」

「そうなのか？」

呪いや言い伝えも、自分にとって都合のいい話は利用するけどね。本物に出会ったことはない。

「天候を操る道具の当て、ないかしら。雨を降らせる呪いだったら幾つか思い当たるものがあるけど」

「え、晴れじゃなくて逆に雨を降らせることならできるのか？　真つ当な道具しか取り扱ったことがないって言っていたのに……」

ちらつと月を見ると、興味津々といった表情だった。仮面からのぞく目がキラキラしている。

「んー、前に読んだ書物によると、だけど。たとえば、大きな火を起こすこととかね。呪いのひとつとして火を捧げて雨を降らすって方法が記されているのよ。……まあ、本当に降るかどうかは別としてね」

農作に必要なためか、昔から雨を呼ぶ呪いは書物に記されていた。

「その本に雨をよませる呪いとかは記されていないのか？」

「私が知る限りでは載っていなかったわね。けれども、私が知らないだけで存在している可能性もあるから、ひとまずそういった呪具を取り扱ってほしいような店に行くわよ」

お代わりの団子も食べ終わって、月も満足したみたいだ。

支払いを終えた私は、月に担がれる。

彼の左腕に腰かけて、首に手をかける。うんうん、安定感がある。

籠役といっても、実際に籠を牽くのではなく、腕に乗って移動するのだ。

彼は体幹がしっかりしているからか、歩き出しても身体が不用意に揺れることはない。

「呪具を扱っている店の当てはあるのか？」

「まあね……ちよっと気乗りしないけど」

今から行くのは、まだ月を連れていったことがないお店だ。

「品物の金額が高いのか？」

「店主が変わり者なのよ」

「へー」

……なんだ、その意外そうな声は。変わり者の知り合いばかりのお前に言われるほど変わり者なのか、なんて感想が言外に聞こえる気がした。ぐぬぬ、いや、単なる相槌かもしれないけど！

「しかし、紅^{ホシ}は、そんなもの存在しないから手に入れられないとは言わないんだ。調べて、なかったとしても、なんとか代替のものを手に入れようとするし」

「当然よ。依頼者の希望するものを用立てるのが調達人なのよ。調査はしっかりとするわ。存在しないってことの証明は難しいからね。遠回りに見えるかもしれないけれど、地道に可能性を潰して進むのが一番の近道であることが多いんだから」

可能性を潰すためにはまずは調べることが必要だ。依頼者が望むものを手に入れるために、私は着実に事を進める。

一方、依頼について月も気になることがあったようだ。

「今回の依頼、依頼者が天気を晴れにする呪具を探しているのはわかったんだが、紅^{ホシ}は他にも気にかかっていることがあるんだろう？」

月もそろそろ私の性格がわかってきたらしい。

「彼女、自身の占いに自信がないのって言ったのよ。とても追い詰められたような顔をして。何故あんなにも彼女は思い詰めているのかしらね」



胡散臭い……おっと、珍しいものを取り扱っている店——夢燈^{むとうや}屋は、表通りを離れて入り込んだ裏道にある。

廃墟のような佇まい、そして店先に並ぶよくわからない異様な物体。

商品には鉄貨一枚から銀貨一枚まで幅広い値段がつけられている。

月は、店の雰囲気になんかビビっている。

店の中に入るように指示するけれど、その歩みは遅い。

大男がブルブルと震える様は可愛いと言えなくもないけれど、抱えられている私にも振動が伝わってくるので勘弁してほしい。

「轉常^{くわんじょう}、いる？」

ほら、行け！ とべちべちと月を叩いて店の中に入ると、整った顔立ちなのに近寄りがたい存在が店の奥からぬつと現れた。

原色の帯を何重にも巻き付けたような格好で、髪の毛を天弓色^{てんきうしき}に染めた男。素材はいのに大層残念な姿だ。

奇抜な格好をした男は、私を抱える月を見て、目を爛々^{らんらん}とさせる。

男が一気に距離を詰めてきたため、月が驚いて仰け反った。

「ほう、ほう！ これは珍しい！ 背丈はどのくらいです。肌の色はそんなに濃くない

な。なにを食べるんですか。鬼の一種ですか？ どうやって捕まえたんですか？」

普通の人より一回り大きな月に興味を持ったのか、男はこちらが言葉ひとつ挟むことができない勢いでまくし立てる。

轉常テウジョウという男は、この胡散臭い店の主だ。

古今東西、様々ないわくつきの代物を集めており、遠方の珍品にも造詣ゾウキが深い。

ただし、いつ見ても変な格好をしている。この前は蠮螋カマキリのような鮮やかな緑色の服を着て日光を浴びていた。不審人物すぎる。

彼は床に這いつくばり、月の足に張り付くと爪先から腰までペタペタと触り始めた。

「うわっ、いきなりなにをするんだ！」

月が慌てて私をさらに上に抱え上げる。私を守ろうとしてくれているのだろうけど、腕や首筋に浮いた鳥肌が彼の心境を表している。

まあ、月じゃなくてもこれは引く。

「ほうほう、人に近い音域ですね！ 発音器官に問題があるのでしょうか、それとも鬼の種族独特の発話なのかな？ 唸り声のような部分に興味が湧きますね。生きた検体があるのはいいですね、ヒヒヒ。で、紅姑娘サンクニヤ。これいくらです？」

「一月銀貨十枚」

「買いましよう！」

月の給金は月五枚だから二倍にした。

「紅!!」

月が泣きそうな目で私に訴えかけてくる。

「冗談よ、冗談。ちよっと轉常テウジョウ。私の籠役カウシヤクにベタベタしないでちょうだい。金取るわよ。——少し探しているものがあるの」

「金でいいなら言い値を払いますが。まあ、嫌がる検体をむりやり刻むのは好みません。それで、紅姑娘ハクコウザン。なにをお探して？ 彼のつけている鵒ニエの面と対になっている、管狐クダウネと呼ばれる東方の妖あやかしの面もありますよ。お得意価格で少し値引きいたしましょう」

どこから取り出したのか、轉常テウジョウが目元に朱が入った狐の面をにゅっと差し出す。鵒ニエの面と同じように額から鼻にかけてを覆い、口元は隠れない仕様になっている。

「えっ、普通に可愛い。……じゃなくて。ええと、今回探しに来たのは、天候を操る呪具クワグなの。雨を降らせないための道具とか、晴れにする呪具とか。占いでも呪術でもいいわ。なにか聞いたことがないかしら」

店主は変わり者で、店も繁盛しているようには見えない。

商いをしていっていても道楽のようなもので、取り扱っているものも海の外から仕

入れた法外な値段のものから、孤児たちが集めてきたようなガラクタまで様々だ。

「雨乞いの道具ならありますが……その反対ですか。そうですね、これとかどうです？ 敵国に贈り、雨を降らせなくしたという呪いのお札。一か月日照りが続き、作物は枯れ、甚大な影響を及ぼしたものの……」

「規模が大きいわね……本物なの？」

「と、言われております」

ニバツと笑って言うけれども、大層胡散臭い。月が呪具の内容を聞いて怯えたようにしがみついてくる。

「他には？」

「天候を司る神々に生贄を捧げる手法が載っている巻物を見たことがあります。どうでしょう。二、三十人ほど埋めてみるというのは」

「却下よ」

他にも轉常は知る限りの知識を披露してくれるが、どれも胡散臭い。

うーん、実行可能なものはないな。

「なあ、紅。大丈夫なのか……？ こいつ、ちょっと……いや、かなり怪しいんじゃないか？」

いつもは性善説を唱える月が珍しく弱気を見せてくる。

言いたいことはものすごくわかるのだけれどね。

「つまり、一時的にでも天候を変える呪物、ないし方法はないのね？」

「僕が知る限りでは」

それだけ聞ければ十分だ。

店主は変人だけど、変わったものに関する知識だけは本物なのだ……彼が知らないということは、現時点でこの国で手に入る可能性は低い。

さて、どうしたものかしら。

「ありがとう、とても参考になったわ」

「お役に立てず申し訳ないです。またのご来店をお待ちしております」

月はこの店を出られるのが嬉しいのか、ほっとしている。

「そちらの鬼の籠役様も、いつでもお待ちしております。ええ、本当に、いついつまでも！」

「は、はは。どうも……」昨日にでも行こうか……」
引きつった月の愛想笑いなんて珍しいものを見てしまった。



「紅、お前は本当に色んな店と繋ぎがあるのだな」

月は夢燈屋から出ると、後ろも振り返らずにそそくさと走って表通りまで出た。どうやら心底あの店主が苦手らしい。

「まあね。彼は変人だけど、扱う品物と知識量は買っているのよ。変人だけだね」

「変人って二度言ったな……。それでこれからどうするんだ？」

「うーん、引き続き情報収集かしらね。馴染みの書店に行つて、西域の書物とかになにかそういった呪いみたいなものがないか調べるって感じかしらね……」

あの店主が知らないからといって、彼が知らないだけで書物に書かれている可能性がある。念には念を入れて可能性を潰していこう。

馴染みの書店を訪ねると、書物の状態を確認していた初老の店主がこちらを一瞥する。『なんだ紅と月か』

すぐに興味を失って、作業に戻……らず、いそいそとお茶とお茶請けの胡桃を用意し始めた。

「爺さん、ありがとう！」

月が嬉しそうに、出された素焼きの胡桃を頬張る。

いやいや、待つて。私だけが来たときと随分と対応が違うな!!

本を読むのが好きだという月を何度か連れてきたことがあるが、どうやら店主は色々な文字が読めてそこそこ博識な月のことを気に入ったらしい。

本が汚れるから塩や砂糖などは厳禁なのだが、欠片が飛びにくい素焼きの木の実を本が置いていない作業台に出してくれた。偏屈な店主にしては破格の待遇だ。

見た目のせいで敬遠されるけれど、月は結構人たらしなんじゃないかな？

古くから通っている私は複雑な心境だ。ぐぬぬっと、漏れそうになる声を堪えつつ、店主に尋ねた。

「ねえ、天候にまつわる呪物や儀式について書かれた本はないかしら」

店主は月の茶請けの椀に木の実を追加しながら、後ろの棚を示す。

「ありがとう」

手拭きで手を拭った月と一緒にその棚の本を調べる。

膨大な量の本を調べるときや、調べる内容が明確な場合は、本の表題や目次からあたりをつけて探すことが多い。

辞書や帳面、呪物一覧などを優先して探す。伝記や物語の優先度は低い。というのも、今回は本当に呪物があるのか、あったとしてそれが入手できるかといった部分が重要なので、物語性が高いものは信頼度が低くなる。

今までは自分一人でコツコツ調べないといけなかったけれど、今は月^{ユヱ}がいるから効率がいい。

関係ありそうなことが書いてある山、そうでないけれども調べる必要がある山と書物を仕分けて、内容を精査する。

「ついだ。その棚の書物を整理しておいてくれ」

店主から注文が飛ぶ。まあ、それで調べさせてくれるのならありがたい話よね。

二人で一刻半（三時間）ほど集中して内容を確認した。

「紅^{ホシ}、載っていないな」

「うーん……」

やはり、私が知っていること以上の情報は得られなかった。

「星見の宴って、この『宮中祭事図録』に載っている宴のことだろう？ どこにもそんな呪具を使った前例はないな」

「うーん、『宮中祭事年表』もくまなく探したけれど、やっぱり他の祭事と違って、星

見の宴は、雨天で開催日時が変わる事例が度々あるのよねえ。でもって、宴を取り仕切る者の情報とかも残されていたけれど、暦を占った者が外したからってクビになることはなくて、同じ人物がその翌年や翌々年の宴でも占っている記述があるの」

呪具に関しての資料だけでなく、星見の宴についても載っている資料があったので、そこらも探した。幾つか詳細が載っている資料を見つけたが、見つけた情報も載っていないかった。

「なあ、どうしても晴れにしなければならぬのか？ 記録を見た限りだとそうは思えないんだが……」

月は首を傾げて書簡を見ている。

昔見た宮中の禁書庫にあった宴の資料でも、そんなことは書かれていなかったはずだ。星見の宴において、開催日が延期される可能性はある程度含まれている。

だからこそ、あらかじめ予備日を設けているのだ。

となると引かかるのは、今回の女官が宴を必ず一度で成功させたいと切望している部分だろうか。

「女官が言っていた、二度は失敗できない……つまり以前失敗してしまった事例があるってことよね。おそらくそれが、失敗してはいけないと彼女が追い詰められている理

由に繋がるんじゃないかしら。呪具についてはある程度調べがついてしまったから、今度には女官側……あの女官の過去について調べてもらおうかしら」

私が重宝している情報屋は蝙蝠こうもりといって、様々な場所に潜伏して情報を入手してくる凄腕の集団だ。情報屋だけでなく人材派遣業もおこなっていて、これまでも色々とお世話になっている。

月はそこでもまた首を傾げる。

「なあ、紅は女官のなにか気になっているんだ？ 純粹に初めての大仕事だから気負っているだけじゃないのか？ 占った日に宴がうまくいくようにって願うのは誰でも一緒だと思うんだが……」

月の疑問も理解できる。星読みの一族としての重圧、藍妃から直々に任されて、というこで心的負荷がかかっているのは否めない。でもそれだけではあの表情には足りない。

「気負うのは仕方がないとしても、それだけじゃない気がするのよね」

彼女から感じたのは、凄まじい恐れだ。

祭事はいいい取りを占っておこなうが、天候ばかりはどうしようもない。

過去の暦から統計学的にいい日を選んで、それは絶対ではない。

けれども、あの女官の様子はそうだったこと以前に……

「おそらく、昔、大切ななにかを占って決めたけれど、失敗してしまったのかも。自分の占いに自信がないのはそのときの記憶から。だから彼女は呪具でもなんでも使って、宴を成功させたいと願ったのではないかしら」

その出来事を紐解くことができれば、なんて考えたときにふと思う。

「ねえ、月。私ひとつ思ったことがあるのだけれど」

「ん、どうした？」

「たとえばね、もし仮に暗れにする呪具を見つけることができたとして、それで依頼は成功、と言ってもいいのかしら」

「んん？ 依頼品は納品できたから依頼は達成ってことだろう？」

「だって占う度に、不安だからって毎回呪具を取り寄せるの？ それでいいのかしら？」

「それは……」

月は困ったように目線を落とした。

やはり私たちは女官のことについて知らないといけない。

念のため星見の宴が詳しく載っていた資料を何冊か購入し、私たちは帰路についた。



あの女官はどんな人物で、どのような過去を持ち、どうしてあそこまで思い詰めた表情をしていたのか。

情報屋——蝙蝠にも情報収集を頼んだけど、自分でも探らないと。

月に宮廷の隅で待っているように指示したあと、私は後宮で彼女の情報を集めることにした。

「星見の宴ってどんなものなのでしょうか」

女官の情報を探るには、さりげなく聞くのが一番……ということで、藍妃宮の井戸で女官見習いたちが洗濯をしているところにそれとなく近づいた。

もちろん「今度後宮に納品予定の石鹼があるのだけれど、女官の皆様にお使いいただけるか不安で……もしよろしければお試しいただけないでしょうか」と、試供品を渡す名目で近づいている。

ふふふ。人間、別の目的を先に提示されると、そちらに意識が向いて疑いにくくなるのよね。

それにこの姿だと商家の奉公人……みたいな誤解をしてもらえるので助かる。

「星見の宴は、名前そのままの宴よ。この夏の夜空は星が綺麗に輝きやすいので、星を肴にお酒を楽しむのよ」

準備も大変なのではないですか？　なんて問いかけると、女官見習いたちは嬉々として宴について語ってくれた。

「皇帝も他の宮の妃様もおいになるので緊張するけれど、例年藍妃宮で取り仕切っている宴だからね。張り切っちゃうわ！」

「そうなのですね。でも……お天気は読みにくいじゃないですか。晴れの日に必ず宴を開催するって難しくないですか？　突然雨が降ることもあるでしょうし……」

洗濯を手伝いながら、天候の話を持ち出す。

女官見習いたちは顔を見合せて笑った。

「雨になること？　稀にあるわよ。例年、宮廷の呪術師に暦を決めてもらっているけれど、どうしてもね。ほら、天気は絶対はないから」

「んー、宮廷の呪術師でも当たるのは八割くらいかしら……」

「それでもよく当たるほうよね」

国が認める呪術師だとしても当たって八割。やはりそのぐらい的中率か。

「前帝の末姫様は占いがお得意で天候を外さないって聞いたけど、それも昔のことだものね」

移り変わりののはげしい夏の天気はそのぐらい読みにくいのだ。

「雨だとうなるんですか？」

「星が見えなければ宴の意味がないもの。当然日を改めるわね」

「そうそう、念のために何日か宴の予備日を設けているし」

皇帝も参加する大きな宴なのだ。もしものときのための対策はしてある。

女官見習いたちもそれで予定が狂って困るといった表情でもない。

「その、占いが外れたら藍妃様や皇帝陛下からお叱りがあるとか……」

「ないわよ。前帝の時代じゃあるまいし。そんな過激なことを言う人は大粛清でクビを飛ばされてしまったもの」

そう言った女官見習いは慌てて口元を押さえる。

今の話は内緒にしてね、なんて言ってきたので、私はにこっと笑って聞かなかったことにする。先帝時代のことは禁句に近いのだ。

うむむ、必ず晴れの日を当てなければならぬという制約もなさそうだ。

そうだとしたら、ますます疑問に感じる。女官があそこまで思い詰めるのは何故か

しら。

「だからこそ思うのよね、今年から日取りを任された彼女も、あんなにも思い詰めなくともいいのに……」

おつ、ありがたい。自然と星読みの女官の話になった。

このままうまく彼女のことを聞き出すことができるだろうか。

「まあ、今年から任された方がいらつしやるのですか？」

私が驚いたような表情で尋ねると、女官見習いがこそっと耳打ちしてくれた。

「ええ、この前藍妃宮で働き始めた白家の分家筋の方がね」

「まあ、後宮に入ったばかりなのに、大役を任されるなんてすごいですね」

探りを入れると、女官見習いたちが話に乗ってきた。

他の女官見習いも洗濯の手を止めてこちらに近寄る。

気が付けば、内緒話をするように井戸の前で小さな円になっていた。

「ちょっとね、ここだけの話だけど……後宮で働き始めてすぐに榮^はえある役目でしょう？ それで古株の女官たちが彼女にね……」

「あなたのような新参者の女官に務まるのか！ なんて叱責を……」

「まあ」

思わず声が漏れてしまった。

これはドロドロの予感か？ 妙にワクワクしてしまう。

話を振った女官見習いは小声で囁いた。

「いわゆる先輩からのいびりってやつね」

新参者いびり！ 部屋の隅の埃を指でなぞってやり直しをさせるやつね！ 書物で読んだことあるわ！

「だから彼女も『失敗できない』って追い込まれてしまっているのではないかしら……」

「可哀想に、彼女、不安のあまり眠れないのか、いつも青ざめた顔をしているわ」

「なるほど……」

うーん、確かにそれなら彼女が追い詰められているのも納得だけど……なにか腑に落ちないというか……

「僻んでいるだけだから気にしないでねって彼女になかなか言えなくて……」

「そうそう、私たちもまだ見習いだから強く言えないのよね……」

「潰れる前になんとかしてあげたいけど……」
はあ、と頬に手を当てて憂えた女官見習いたちが溜息を吐く。

……どうやら星読みの彼女は女官見習いたちから心配されているようだ。

心配してくれる人がいるってわかって、少しほっとしてしまう。

「それになんだっけ、彼女が後宮に来た理由」

「ああ……理由が理由だから、ねえ」

彼女が後宮に来た理由？ 星読みの血筋を買われて、ではなくて？

「後宮に来た理由、ですか？」

「それがね……これも内緒の話なんだけど、彼女……好いた男と駆け落ちする予定だったって」

「あつ、こら、それは噂よ噂！」

「あつ、そうだったわね」

理由を話した仲間の肩を、他の女官見習いが慌てたようにバシバシと叩く。

かけ……おち……駆け落ち!?

あんなにも生真面目そうな女性が？ あまりにも想像がつかなくて、こちらも声が上ずりそうになる。

私はじっとその話題を振った女官見習いを見つめる。

その視線に負けたのか、彼女はここだけの話よ、なんて前置きして詳しく話してくれた。

「彼女、祭事を司る白家の分家の中でも特に占星術に長けた家の娘さんでね。家を継がずに後宮に送られたのは幼馴染の青年と駆け落ちしようとしたからだって」

結構宮でも噂になったんだから、と彼女は補足する。

「あれ？ 相手は村に兵役で来ていた武官だって聞いたけれど」

「私はお忍びで村を訪れた貴公子って聞いたわよ」

う、噂だからか、結構話が分かれている。

だけど、彼女たちの話はすべて、駆け落ちに失敗して後宮に来た、という部分是一緒のようだった。

「白家の分家の方なのに、本家の姫がいらっしやる白妃宮にお仕えすることにならなかったのはそういう事情って聞いたわよ」

「まあ、本家の姫様にお仕えするには障りがあるってこと？」

なるほど……駆け落ち、ということであれば白妃宮で勤めるには少々問題がある。

白妃の入内に際しても女官の駆け落ち騒動があったのだ。それを連想させるような娘を入れることは白家も避けるだろう。

「だからここに来てしばらく塞ぎ込んでいたって話だったわね」

うーん、すごい話を聞いてしまった。

それからしばらく井戸端会議に参加して情報を集めたが、それ以上の収穫はなかった。たくさん話を聞かせてくれた彼女たちに、お礼の意味を込めて、もう少し高級な試供品を渡す。

依頼主の女官が追い詰められていた理由は、どうやら彼女の過去に原因がありそうだ。少しだけ迷って、よしと覚悟を決める。

それなりの情報は得られたが、どうにも曖昧な内容だった。

情報を精査するためにも、私は星読みの女官に直接会いに行くことにした。



星読みの女官の所在を尋ねると、この時間帯は藍妃宮にはいないとのことだった。併設された女官用の建物を訪ねればいいと言われる。

早速向かうと、目的の女官が白装束姿で井戸の水を頭から被っているところに出くわした。

ひえっ、井戸水は地下水を汲み上げているから冷たいはず。

「まあ、夏とはいえ冷たいのではないですか!？」

驚いて駆け寄る。女官はほんやりとした表情をしていたが、やがて焦点が合うと、調達人、と小さく声を上げた。

「いつから井戸水を浴びていたのですか。身体が冷え切っています！」

「いえ、私は、襖をしなければなりませんので……」

ふらふらと井戸水を再び汲み上げようとす。

顔は青ざめ、唇も紫色になっている。

これは、だいぶ精神的にきているわね。

「白星蘭様、このままではお身体を壊します。宴を控えた大切なときですもの。ここで体調を崩しては本末転倒です」

「でも、私は……私は宴を成功させないと……」

彼女の冷え切った手をきゅっと握りしめる。

「白星蘭様。なにをそんなに焦っていらつしやるのですか。白星蘭様は万全を尽くして

占っていらつしやるではありませんか。私がお役に立てることは少ないかもしれませんが、もしよかつたら憂慮なさっていることをお聞かせ願えませんか？ ほら、心配事は口にして笑い飛ばしたほうがいいっていうでしょう？」

上目遣いで必殺、どうしたの、話聞くよ？ 作戦だ！

うるうるとした瞳で見上げたからか、彼女の目に冷静な光が戻ってくる。

「ですが……」

よし、迷っている。もうひと声だ！

「白星蘭様。私は調達人です。善き調達人とは、善く聴く耳を持ち、善く観る目を持つ者を指します。けれども同時に善く沈黙する口を持つのです。調達人は、依頼人の話を外には漏らしません。あなた様のことはこの心の内に留めておきますので、どうか話を聞かせてくださいませんか？」

じっと見つめると、彼女はふっと目を落として儚げに微笑んだ。

「調達人……そうね。あなたに依頼をお願いしているのだから。まったく関係がないわけでもないわね。それに、後宮の者でないからこそ、言えるかもしれない。……私の不安を、聞いてくださるかしら」

「もちろんです」

よし、どうにか話を聞かせてもらえるようだ。

「なにか……どなたかに、此度の宴で重要な役目を任されたことについて言われたのですか？」

先輩からいびられたって話だものね。まずはそこについて心配をしてみる。

彼女は首を横に振った。

「とんでもない。優しい女官の先輩方は心配してくださっているわ。その心配も当然のことなの。だって私は古いが怖くて怖くてたまらないから……」

なんと……他の女官たちの『あなたのような女官に務まるのか』という言葉をとっても好意的に受け取っている。

どうやら新人いびりによって追い詰められているわけではなさそうだ。

となると、理由はもうひとつ。

「以前に……占いによってなにかあったのですか？」

「それは……つくしゅっ」

おっといけない。

井戸水で身体を冷やしすぎてしまったようだ。

小さくくしゃみをして震え始めた彼女を見て慌てる。先に服を着替えさせなければ。

ついでに厨房から温かいものをもらってこよう。

着替えをすすめると、彼女は頷いた。

「……女官として与えられた部屋があります。そこで……お話ししましょう」

部屋を教えてもらってから一度彼女と別れ、厨房に向かう。

厨房にいた料理人に湯と茶葉を分けてもらえないかと尋ねると、小さいのにお茶の準備ができてえらいわね、と飴を握らされた。うぐぐ、飴をもらう年ではないというのに。

茶器になみなみと入れた温かいお茶を慎重に運びながら、彼女の部屋をを目指す。

部屋の外から声をかけると、彼女は着替えが終わっていたのだろう、すぐに扉を開けてくれた。

部屋は小さいながらも丁寧に整えられており、占いのための星見盤などが置いてある。祭事を司る血筋という話も納得がいくものだった。

服を着替えた彼女は温かいお茶を飲みながら、ぼつりぼつりと話し始めた。

「私に、もつとしつかりと占う力があればよかったのだけれど……」

「以前、占いでなにかあったのですか？」

慎重に言葉を選びながら、話を促す。

彼女は少しだけ迷うような表情を浮かべたあと、私の目を見て口を開いた。

「あなたも、もしかしたら誰かから聞いたかもしれないけれど、私はここに来る前に幼馴染の青年と……家を捨てて駆け落ちをする予定だったの」

おっと……いきなり核心的な部分を話してくれるのね。

そこまで赤裸々に話して大丈夫かしら……と心配しながらも黙って聞く。

「……私は星見盤で占ったわ。どうかどうか、彼と逃げるのにいい日を教えてください。……」
 未来を。雨だったら星読みとしての未来を選びます』って……」

彼女は星読みの娘として、自身の未来を占いに託すことにしたのか。

「白星蘭様、それでは駆け落ちの決行日は……」

「大雨だったわ。驚くほどの土砂降りで、彼と逃げることはおろか、前も見えない有様だった。彼と逃げるのにいい日を教えてくださいって占ったのに……」

当時のことを思い出しているのか、彼女は苦しげに目を閉じる。

「それでは……駆け落ちはできなかったのですね……」

「ええ。戸の前で立ち尽くしていたら、両親に見つかって。それで、両親は私をあの人に置いておくことはできないって判断し、星読みの一族として、後宮に入れることにしたのよ。……後宮に入ってお役目を全うすれば、駆け落ちなんて馬鹿な考えはなくなるだろうって……」

なるほど、彼女は自身の星読みの能力に己の未来を託したのだ。

そしてそれは彼女の思うようにはいかなかった。……それで、自分に力がないと落ち込んでしまったのか。

「ねえ、調達人さん。私は能力がないのに、ここにいていいのかしら。力もないのに星読みの一族と言ってもいいのかしら……。私が宴の日程を占うだなんて……」

虚ろな表情でほんやりと空を見上げる彼女は……とても悲しそうだった。

きつと、駆け落ちの夜に、占いに対する自信を喪失してしまったのだろう。

私には彼女を救うような、うまい慰めの言葉（なぐさめ）をかけることはできない。

けれども……それでもひとつだけできることがある。

「白星蘭様。私が白星蘭様からご依頼された必ず晴れにする道具をお届けすれば、お喜びになりますか？」

「え？ ええ。もちろんよ。それがあれば、もし私の占いが外れたとしても、宴は成功するのだから。藍妃様に迷惑をかけなくて済むわ」

「そうしてまた別の占いの際には、代替となる道具をお求めになるのですか？」

「そ、それは……」

サアツと女官の顔が青ざめる。

彼女は、そのとき初めてこの問題の本質を理解したようだった。

道具に頼ってしまえば、「宴が成功したのは、道具のお陰」だと、自身が思うのだから。

そうであるならば、彼女の不安は永遠に消えることはない。

『白星蘭様、あなた様が本当に欲しいのは、『天候を晴れにする道具』ですか？』

「わた、私は……」

考えたくなかったことを突きつけられて、彼女の心は揺らいでいる。

「白星蘭様、私は調達人です。どんなものだって、ご用意してみせます。あなたが望むのであれば、『白星蘭様が星見の宴を成功させ、今後憂いなく星読みの一族として生きていけるもの』をご用意することだってできます」

「……本当に？ 本当にそんなものを用意することができるといふの？」

女官の揺らいだ瞳が私を見つめる。

「もちろんです。白星蘭様は星見の宴に相応しい、最良の日を選びました。私はそれを証明できるものをご用意できます」

「そんなものがあるのなら……。お願い、調達人。私は自分の占いをもう一度信じたいの」

「ええ、この私、紅姑娘にお任せください」

それから私は彼女の幼馴染との馴れ初めを聞いた……近所に住んでいた男の子だったこと。家族で都に移り住む彼を見送ったこと。祭りの日に偶然再会して急速に気持ち

近づいたことなど、月が聞けば大はしゃぎしそうな甘酸っぱい恋話だ。

うつ、心の片隅に住む月が、それでそれで？ どんな告白だったんだ!? なんて恋愛御伽草紙を読んだときのように盛り上がっている。

彼女の切ない、けれども過ぎ去った過去を慈しむような話をたつぷりと聞いて、私は依頼を達成するために念入りに準備をしなればと気を引き締めた。



白星蘭と別れ、仕事の段取りを考える。

本人からの情報は集まった。けれども、それが本当かどうかの精査も必要だ。

以前依頼をした情報屋の蝙蝠から話を聞き、奇妙なものを取り扱う店——夢燈屋をもう一度訪ねない。

月と合流して宮廷を出ようとしたが、彼の姿が見えない。

あれ、おかしいな。普段なら私を待ってその辺に隠れているのに。

きよろきよろと茂みなんかを覗いて彼を捜していると、遠くの方から小走りでごちらに走ってくる姿が見えた。

「月、どうしたの。そんなに遠くから走ってきて」

「いやあ、ちょっと不審人物を見かけてな。気になって追いかけてしまったんだ。武官の服装をした若い男だったんだが、通常の巡回路と違ったし、ふらふらと後宮の壁のほうに向かっていったから、おかしいと思って見張ってたんだが……気配に気付かれて逃げられてしまった」

いやあ、あと少しだったのに、失敗失敗、と月が悔しそうにしている。

「巡回路が違うってどうしてわかるの？」

「え？ 宮廷に通っていれば、この衛兵はこのルートを巡回している者だなんてわからないか？」

衛兵の巡回ルートは結構複雑だ。同じ時刻や順路を使うと情報が流出したときに忍び込まれる危険が大きいから、あえて複雑にしていると知り合いの武官が言っていた。

月はぼんやりと私を待っているだけじゃなくて、そんなことも意識していたのか！ 思ったよりも仕事をしていて驚いた。

彼はその後も少し周りを警戒していたけれど、異変がないと判断すると、よいしょと言って私を抱きかかえた。

「それより、紅のほうは収穫があったのか？」

「だいぶね。白星蘭様は相当追詰められているみたいだし、話を聞いてちょっと調べないといけないことや、やらないといけないことが増えたからひとつずつ片付けていきましょう。この前行った夢燈屋と情報屋の蝙蝠、どちらから先に行きたい？」

「蝙蝠のところに先に行ってもいいだろうか！」

本当に夢燈屋が苦手……というか店主が苦手なのね。

「わかったわ。それなら蝙蝠のいる茶屋ね」

「ああ、ついでに団子も食べてもいいだろうか！」
情報屋は普段、茶屋に偽装している。月と一緒にいくと、だいたいそこで団子も食べることになる。

あそこの本職は茶屋ではないのだけれど……まあ、月の機嫌がいいと移動速度がちょっとと速くなるのでよしとするか。

蝙蝠には早い段階で情報収集を頼んでいた。

その報告がもうそろそろ上がっているはずだ。

今日出迎えてくれたのは、未亡人の色香がある店員だった。

泣き黒子が特徴的で目が吸い寄せられてしまう。